

第 9 回群馬整形外科研究会

日 時：2006 年 4 月 15 日 (土)
場 所：群馬大学医学部内「刀城会館」
代表世話人：高岸 憲二

主題 I 整形外科における保存療法

座長 三村 清 (三村整形外科医院)

1. 交通事故による高エネルギー外傷によって頸椎不安定性を生じた小児に対する保存治療の一経験

荒 毅, 松下 正寿, 竹内 公彦
浅見 和義, 星野 貴光, 久保井卓郎

(前橋赤十字病院 整形外科)

脳幹部周囲から、上位頸椎にかけての高度な損傷は通常致命的であり、治療の機会を得ることは稀と考えられる。今回我々は交通外傷によって、頭蓋底から後頭骨、上位頸椎にかけて高度な損傷を伴った小児 1 例の治療を経験したので報告する。

【病 歴】 症例は 12 歳男性。既往歴に特記すべきことはない。H17/6/1 登校時に自転車に乗っていてトラックにはねられ受傷し、当院救急外来に搬送された。来院時意識は軽度混濁、顔面の著明な変形と、口腔内出血、右大腿骨骨折を認めたと、四肢に明らかな麻痺を認めなかった。画像所見では、前方からの強大な外力によって顔面骨が広範囲高度に圧潰され、これに伴って頭蓋底が上前方から下後方に大きく傾斜し、後頭骨斜台にも骨折は及んでいた。それに併せて環椎も傾斜し、後頭環椎関節は後方に脱臼し、軸椎歯突起の後屈変形と、上位頸椎の後彎が認められた。これらの変形のために、延髄は大後頭孔前縁によって前方から圧迫され、O-C~C2 レベルで脊髄は強く前彎していた。神経症状が全く認められなかったこと等から、頸椎の手術は行わず、ハローベスト装着による保存療法の方針とした。肺挫傷を伴っており、全身状態の急変があり得る状態であったため、ハローベストは即座に装着せず、5 日後に装着し、脳幹部~上位頸椎に及ぼす影響を考慮し、装着に際して、頸椎のアライメント矯正は行わなかった。10 週後にハローベスト除去し、フィラデルフィア装具装着にて退院となり、4ヶ月でこれも除去となった。現在、神経症状や頸椎の運動障害、痛みはなく、徐々に軽スポーツも可能となっている。10ヵ月後の動態 X-P にて、頸椎の不安定性は軽度

残存し、変形は残っているため、今後慎重な経過観察が必要と考えられる。

2. 中高年者の内側半月板切除後の MRI 一骨髄信号強度の変化における足底板の影響について一

佐藤 直樹, 木村 雅史, 小林 保一
朝雲 浩人, 神林 真一, 滝 正徳
鴫田 朝海, 生越 敦子

(善衆会病院 群馬スポーツ医学研究所)

高岸 憲二 (群馬大院・医・機能運動外科)

【目 的】 膝半月板切除後に MRI 骨髄信号変化が生じることが認知されている事実であり、膝骨壊死との関連についても検討されている。また、足底板の骨壊死に対する治療効果の報告を見る。今回、中高年者の内側半月板切除後に楔状外側高足底板を装着させた場合の MRI 骨髄信号変化を調査し、足底板の有用性について検討する。【対象および方法】 40 歳以上の内側半月板損傷例を対象とし、術後に足底板を使用した群を group 1、使用しない群を group 2 とした。それぞれの骨髄信号変化、損傷半月板の切除範囲の相違による出現頻度、術中の軟骨損傷の程度による出現頻度について検討した。【結果】 それぞれの出現頻度に有意な差はなかった。しかし、部分切除において group 1 の出現頻度が少ない傾向にあった。【結 論】 足底板による、術後の MRI 信号強度変化の出現頻度に有意差は認められなかった。

3. 外来通院により保存的に加療した下腿骨折の 2 症例 三村 清 (三村整形外科医院)

【症例 1】 右足関節脱臼兼両果骨折 (Lauge-Hansen 分類: Pronation-abd.). K.J.: 36 歳 ♀, 既往歴: マタニティーブルーにて加療中, 1 歳 3 ヶ月の女兒, アレルギー体質にて授乳中, 平成 17 年 4 月 5 日フローリング床の台所で右足を滑らせ、足関節を捻り受傷、静脈麻酔下に徒手整復、右下肢ギプス固定, 4 月 23 日 3w ヒール付, 部分荷重, 5 月 9 日 1M 右下肢歩行用ギプス固定, 6 月 4 日 2M 膝上ギプス除去, 6 月 18 日 2.5M ギプス切割り, 10 月 3 日 6M, 平成 18 年 2 月 27 日 10M 右足